

“Heart to Heart”

第6巻 第1号 (No.17)

発行日 平成23年7月9日

心から心へ わかちあう あたたかさ

大震災を経験する中で

武蔵野東教育センター所長 長内博雄

目次:

大震災を経験する中で	1
コラム： テレビマンの育児日記	2
療育プログラムのようす	2/3
IMFAR・国際自閉症研究 大会参加レポート	4
ご案内	4

3月11日に起きた東日本大震災は、被災した地域のみならず、直接津波などの被害に会っていない、ここ東京近隣に住む人たちの生活にさえ、今なお影響を与え続けています。

確かに私たちは今、世界的に地震、火山、洪水、竜巻などの災害が起こっている、きわめて不安定な状況の時代に、生きているということに認識せざるを得ません。

ところで、先の大地震では東京も大きく揺れ、教育センターで受講していた子どもたちは、スタッフの先導で保護者の方共々校庭に避難しました。当日交通の事情で帰宅できなかった親子10名ほどの方々は、北原記念館内に一泊し翌日帰られています。当教育センターでは、これまでに小学校の訓練日に合わせて避難訓練を実施していましたが、子どもたちは、大地震の当日もスタッフの指示に従って、落ち着いて行動できました。教育センターでは、今後とも引き続きスタッフの災害時の対処や訓練、また緊急避難的なことを含めて、備えを進めていきます。

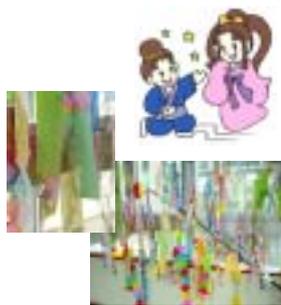
いつ何が起るかは、私たちには予測できないことです。しかしながら、このようなことが起きた時に、気が動転してしまうことのないような心構えは、ご家庭においても最低限必要で大事なことです。不安動揺の想いを持ち続けることが、心身によい影響を与えるわけがありません。実際、東京に住んでいる人で、震災後、地震への恐れから体調を崩して入院された方を、私は知っています。常に、より確かな情報や備えが必要であることは論を俟ちませんが、先の分からないことに対しては、何があっても大丈夫！などと多少開き直って、どっしりと構える気持ちを持つことも必要かと思えます。

一方、この大震災により人々の意識が変わってきたということをよく耳にします。私自

身、宮城や福島の方々とお会いする機会がありました。その時に「でもこの震災があっただけで、隣近所の人たちが今までと違う人かのように、優しくなったのよね！」とおっしゃった方がいました。皆さんも大きく頷いて、大笑いされていたのが印象的でした。被災地に近い方々なので尚更なのだと思いますが、そうした優しさが、国内外に、さまざまに広がっていくことを期待したいものです。

さて、子どもたちは、暑い中連日元気に教育センターに通ってくれています。まさに、この子どもたちの屈託のない明るさが、世の中の浄化力のようにも感じられてきます。文明社会と言われるこの社会も、今やあちらこちらに歪みを生み出して、環境破壊、経済混迷、原発騒動などと、重苦しい空気が生活空間を漂っています。しかし、日々子どもたちと接していると、人間のエゴや思慮の足らなさが作り出した世の中の歪みなどには我関せず、むしろ今の社会の在り方を私たちに問いかけているかのような、アツケラカンとしたたくましさを彼らに感じてしまいます。一歩々々学んでそこに喜びを見出すという、とてもシンプルで素直な人間の姿は、私たち大人こそ学ぶべきことかもしれません。この子どもたちの将来のために、今こそ、住みよい社会への切り口を見出し、押し開いていかなければならないことを思います。

まもなく夏休みに入りますが、保護者の皆さんにとっては、長くてため息が出そうという方もおられるでしょう。ただ子どもたちには、気持ちもゆったりと、自由に活動する時間が多く、この時期に身長が伸びたり、言語やコミュニケーションの幅が広がってきたりするお子さんも少なくありません。どうぞこの夏休みを貴重な時間ととらえて、活動的また健康的に過ごしていただきたいと思えます。



七夕：願いを込めたたくさんの短冊



コラム テレビマンの育児日記(4)

「親の心を傷つける善意のアドバイス」

室山 哲也 (学園アドバイザーボード、NHK解説委員)

自閉症の娘を育てて23年。ずっと続いている悩みがあります。それは、自閉症などの発達障害の原因が「脳」にあるということを、伝えることの難しさです。発達障害の子を持つ親が最初に直面する悩みの一つに「大丈夫よ。きっと良くなるから」という言葉があります。この言葉は親戚や、親しい友人など、発達障害を知らない人から善意で発せられる場合が多いのですが、一つ落とし穴があります。それは、自閉症が脳由来の障害だということを理解していないがために、「今まできちんと育ててこなかったからこんな子が出来た」と言う考えに直結する場合があります。心の発達には「脳」と「環境」が決まります。しかし、「発達障害の原因が脳にある」という考え方が医学的に成立する前、

発達障害は育て方の結果だと考えられた時代がありました。特に母親は、「赤ちゃんの時の育て方が悪かったのではないか」など、様々な自責の念にかられています。そんなとき発せられる「大丈夫よ、きっと良くなる」という言葉は、「発達障害は治さなければならない病気だ。治らなければ負けだ」「環境を変えればすぐ治る(あなたのせいだ)」という残酷な言葉になってしまうのです。私達は、発達障害を引き起こす原因が脳にあることをきちんと把握し、それを踏まえた上で、その子の特性を理解し、教育の環境作りをしながら、成長を誘導していく必要があります。発達障害の子を育てる主体が母親の場合は、母親を孤立させてはなりません。父親は、仕事の忙しさを理由にせず、育児に

奮闘する母親をバックアップし、特に精神的に励ます必要があります。その他の家族や親戚も同じです。この連係プレーを作り上げるのはとても大変ですが、何とか進めていかなければなりません。もう一つ、育児に疲れたら、レスパイトサービスなどを使って子供を預け、映画やショッピングに出て鋭気を養うことも重要です。発達障害の子とともに生きていくのはマラソンのようなもの。あせらずゆっくりと、気長に取り組んでいきましょう。私達夫婦が、23年の子育てで辿り着いた結論は「みんなで幸せになる」ことが大切だということでした。



療育プログラムのようす

このコラムは4回シリーズでお届けしました。



細かいところも頑張って塗っています(右が手本)



はい、ポーズ!



正しい指遣いでタイピング

アート教室 4月から新たに始まったアート教室では、植物や動物の模写、身近なもののスケッチ、水彩絵の具の使い方や混色の練習など、絵を描くことを中心に取り組んできました。7月は透明の亚克力板に夏に関連するものを描いています。色々なサンプルの中から、花火、海辺、蓮の花といった各自が描きたいものを選んで下絵を描き、板に写しました。透明の板越しに見える絵が、味わい深いものになるよう、着色をじっくりと進め、仕上げていきます。(北川)

ダンス教室 4月から積み重ねてきた「ウォーミングアップ」の動作は、担当者の手本を見ながら皆最後までできるようになりました。背筋を真っ直ぐにして姿勢よく歩くことや、足をつま先まで伸ばしながら振り上げることなど、初めて挑戦する難しい課題にも真剣なまなざしで取り組んでいます。動作の中で、力を入れたり抜いたりすることを上手に調整できるよう引き続き練習していきます。(新堂)

コンピュータ教室 タイピング練習に重点的に取り組んでいます。まだ練習を始めて間もないこの時期に基本をしっかり定着させておくことが大切です。ゲーム感覚で楽しめるタイピングソフトを使い、正しい指遣いを守るように工夫されたカラーシール付きのキーボードと手袋をつけて練習することで、着実に上達してきています。慣れてきたらWordの使い方も学んでいき、将来につながる実用的な技術の習得を目指して行きます。(大澤)

音楽教室 4月からほっぺの体操や発声練習を重点的に行ってきましたが、子どもたちの声が大きくなり、歯が見えるほど口が大きく開いたり効果が現れてきました。1-3年は、友だちの前で歌うことにも自信がついてきました。4-6年は、「顔のあらゆる筋肉を動かして歌唱しよう!」と題して毎回楽しく顔を動かしています。ぜひ、活気ある歌声と豊かな表情をのぞきにいらしてください。(高橋)



輪唱「かえるのうたより」

SST教室 レクリエーションの時間にはおにごっこや大縄跳びなど、さまざまな活動を行っています。おにごっこでは、どうすればうまくつかまえることができるか、何人かで相談し合って作戦を考えることができました。また、大縄跳びでは、順番を待っているときに子ども同士で声をかけ合って自主的に練習をすることがありました。このようにレクリエーションの時間は、活動を通して自然に友だちと関わりながらさまざまなソーシャルスキルを学ぶよい機会となっています。(大澤)



島おにのルール説明



幼児 少し不安げな様子の4月からはや3ヶ月。今では「こんにちは」「先生見て!」など元気な子どもたちの声でにぎやかになりました。着替えが終わると、「はじまるよ!」の手遊びや絵描き歌の「くじら」でスタート。みんなの笑顔から「今日は何をするのかな」とわくわくした気持ちが伝わってきます。幼児期に大切な、「季節感」をもとにした作品づくりでは個性豊かな作品ができあがり、「ねえ、このカニ、～ちゃんにそっくりだね」といった声を聞くこともできました。これからの成長が楽しみです。(本田)

1年生 小学生になったことが誇らしくて、1年生はどんなことにも意欲的です。算数は足し算の学習をしています。プリントでの計算練習だけでなく、黒板教材やフラッシュカード、絵本など、さまざまな形で足し算に触れています。繰り返し練習することで、素早く計算できるようになってきました。国語は、「は」「へ」「を」に気をつけて、文を読んだり書いたりする練習をしています。(新田)

2年生 算数では『長さ』を学習しました。定規を押さえる位置や力加減が難しく、最初は途中で曲がってしまう子もいましたが、徐々に始点から終点まできれいな直線が引けるようになってきました。国語では「スイミー」を学習しています。登場する『まぐる』に、最初は「美味しそう」と言っていた子ども達も、物語を読み進めていくうちに「こわい」「やっつけよう」と気持ちが動いてきました。スイミー達のように賢く協力して、この夏を乗りきりましょう。(後藤)

3年生 国語の「いろはにほへと」では、音読で武士になりきり、独特の抑揚をつけて読む子がいたり、紙芝居を見ながら、「あの場面をもう1回見たい」という子がいたりなど、楽しんで学習に取り組んでいます。算数での「大きな数」では、1億までの数を扱い、視覚教材等を用いながら理解を深めてきました。体育のボール運動では、子ども同士ペアになって、お互いに声を掛け合いながらキャッチボールをすることで、上手に捕球や送球できるようになってきています。(宮川)

4年生 国語では、「聞き書き」に力を入れています。まず担当者が100文字程度の文章を読むのと同時に、文章を書いています。そしてその後、文章の内容にそった質問をします。遅れてはならないと一生懸命な鉛筆の音が教室に響きます。聞き書きをすることで、聞き取る力が伸びてきており、質問に正しく答えられる子どもがとて多くなります。日常生活の中でも人の話を聞き漏らすことのないようなトレーニングにつながっていければと思っています。(宮下)



かき氷のできあがり!



フラッシュカードを使って



5cmの線が引けるかな?



「いろはにほへと」を音読中



聞いて書こう!



天気予報を見て答えよう!



対応する点はどこかな?



ちぎり絵作中



集中して見えています



ゴールをよく見て!

5年生 「天気を予想する」という説明文の学習では、基本的な音読や読解に加えて、ニュースでよく目にする天気予報からの読み取りをしました。身近な事柄に関連させることで、子どもたちは「あ、ニュースだ!」「私、よく見てる。簡単!」と、普段以上に意欲的でした。また、気温を示した折れ線グラフや降水量を表した棒グラフの問題は、今まで算数で習った内容の復習にもなりました。実生活に活かせる学びを、これからも友だちと一緒に進めていきます。(北川)

6年生 国語では、子ども達が理解しやすいように、文章を要約した冊子を使い理解を深めました。また、ことわざでは、絵カードを使用しながら学習し、最後にことわざカルタを行いました。算数の点対称では、模型を使用し、180度回転させて同じ形になるのか実際に手を動かし、目で確認しながら学習を進めました。「同じ形になった。」「これがあるとわかる。」と目を輝かせて取り組む姿が見られました。今後も個々に応じて理解しやすい教材を工夫していきたいと思っています。(高橋)

中学生 「敬語」の学習を通して、自然な話し方の確認をしました。先輩に対する話し方や後輩に話しかける時などの確認を行うことで、会話に幅が出てきています。また、音読指導を毎回行うことで、説明文の内容を理解することができるようになってきました。数学は、正負の数の計算練習を行っています。その他にもちぎり絵、コンピュータ、クワイヤフォンを利用した音楽活動、ボール運動など教科学習だけにとどまらない活動を行っています。(藤本)

言語プログラム 今年もPC教材が人気です。見た物を記憶して少し離れた場所から選んで持ってくる練習、「貸す借りる」や「絵本を見る順番」などのロールプレイの動画を見て内容を話す練習をしています。また、「 をコップの中に、 をコップの上に」などの複数の指示を聞きとり動作で表わす練習にも力を入れています。7月からプログラムが増設され、さらに活気づいています。(計野ち)

体育教室 4月と比べると、基本運動(えんぴつ回り、クマ歩き、ワニ歩きなど)で、体を上手に操作できる子が増えてきました。立位姿勢一つとってもその違いは一目瞭然です。器具の特性を理解し、平衡感覚、体の操作性の向上を目指して、幼児はジャンピングボール、低学年は自転車、小学3~6年生は竹馬を行っています。中学生は、肩車、手押し車など友だちと行う体づくりや、バスケットボールに挑戦中です。(鈴木)



IMFAR・国際自閉症研究大会参加レポート

International Meeting for Autism Research

主幹 高松 明広

去る5月、私と大久保、ボストン東スクールからはケリー常務とドノバン校長も合流し、アメリカのサンディエゴで開催されたIMFAR・国際自閉症研究大会に出席してきました。この大会は、自閉症に関する最新の研究発表や情報交換を行う最大規模の催しです。4日間の開催中に、千件を超える講演やポスター発表があり、およそ2千人もの参加者が集まりました。発表内容は、「健常児と自閉症児の脳の発達のしかたの違い」や「自閉症と類似した障害との比較研究による自閉症の特性理解」といった難しいものから、「共感性が弱いとされる自閉症者にあくびはうつるのか？」のようなユニークな観点のものまで、実に様々なものがありました。他にも、自閉症当事者として有名なテンプル・グランディン博士の脳の構造的特徴を実物のCT画像を使って説明したものや、感覚過敏の原因についての研究のポスター発表等々、あまりに沢山の、紙面だけでは詳細をご紹介できないのが残念です。

ところで皆さんは、自閉症者にあくびはうつると思いますか。答えは、「イエス」です。あくびをしている相手に視線がしっかり向けば自閉症者にもあくびはうつるそうです。ちなみに、同行の大久保は、発表に使われていたポスターの挿絵を見ただけであくびを連発していました。「共感性が強すぎる人の研究」でもあれば一役買えそうですね(笑)。

話は前後しますが、今回のIMFAR・国際自閉症研究大会での主な目的は、オーティズム・スピークス財団が

らの招聘を受けて、「自閉症に関する研究と教育の連携を考える会議」に出席することでした。これは、研究者と教育者が手を組むことで「根拠に基づいた教育実践」を促進させ、子どもたちが一日の大半を過ごす学校での支援をより合理的で効果のあるものにしていこうという会合です。「根拠に基づいた教育実践(Evidence Based Practice)」とは、科学的に立証できる方法をもって教育実践を行うことを意味します。もともとは、'90年代に米国の医療システムの改善をはかるために実施された「10万を救うキャンペーン(Evidence Based Medicine)」から生まれた考え方で、そのキャンペーンによって、病院での死亡率を実際に約12万人減らすことができたそうです。その経緯もあって、「根拠に基づいた～(Evidence Based～)」と言うように、医療以外の様々な分野にも転用されるようになりました。



国際的なエキスパートとの交流

今回の会議では、東学園の取り組みと議題に対する考えを発表し、他国のエキスパートたちと交流をもつ貴重な機会を得ることができました。教育の方法や成果が科学的に測れるものかどうかは別として、こうした最先端の考えと試みによって10万人とは言わず、全ての自閉症や発達障害を持つ子どもたちの教育情勢が改善されることを期待しています。

セミナーのご案内

第2回、第3回ともに今のところまだ空きがございますので、どうぞご参加ください。

- ・平成23年9月9日(金)10時～12時
「学習における視覚認知のつまづきとその支援」
～教室や家庭でとりくむビジョンセラピー～
築田 明教(かわばた眼科 視覚発達支援センター)
- ・平成24年1月31日(火)10時～12時
「豊かな心を育む温かい身体の体験づくり」
今野 義孝(文教大学)



武蔵野東教育センター

〒180-0012 武蔵野市緑町2-1-10

電話 0422-53-8585 FAX 0422-53-8595

Email: education-center@musashino-higashi.org

ホームページもご覧ください

<http://www.musashino-higashi.org>

受講者対象 茶話会のご案内

茶話会を以下の日程で実施いたします。参加希望の方は申込用紙を提出下さい。

平成23年10月3日(月)13時～15時



受講者対象 保護者勉強会のご案内

平成23年7月15日(金)10時～12時

「育てようコミュニケーション2」

語彙と表現の拡大 計野 ちあき

「SSTについての基礎知識」 大澤 徹也

平成23年9月29日(木)10時～12時

「教育センターの学習支援」 北川 伸尚

「より自立した生活に向けての支援」 藤本 省司